

内モンゴルにおけるチンギス・ハーン「伝統儀礼」復活

ソロンガ



オボエ：神聖視される山や峠などに石を積み重ねたもの。家畜の繁殖などのため、定期的に祭りを催す。日常的にも、通りがかった人が、石を投げ入れながら右回りに3度巡回してお参りする。

モンゴル統一 800 周年

2006年夏、ふるさとの内モンゴルでチンギス・ハーンによるモンゴル統一 800 周年の記念イベントが行われると知り、調査のために一時帰国しました。見学したのは、チンギス・ハーンの権威を象徴する「白スウルデ」（一種の紋章）の祭祀です。

祭祀が行われたのは、自治区西部のオルドス市ウーシン旗で、内モンゴル自治区の中心都市フフホトから西に 500 キロ離れたところにあります。フフホトからバスで 6 時間でウーシン旗の中心(地方の町)に着きます。

「白スウルデ」祭祀初日

祭祀当日、車で町から西に向かいました。祭祀地は今まで何もなかった草原なので、もちろん道也没有。祭祀地を向かう車が次々と走って行くので、私たちもあとをついて行きました。何百台もの車が走ったあとは草原の草がはがれ、地面からほこりが竜巻のように舞い上がり、数メートル前も見えない状態でした。そんな道を 2 時間走り続けると、遠くに「宮殿」が見えてきました。そこには、大きな観光スポットとして「施設」造られていたのです。

そこからさらに 2 キロ離れたところに丘があって、そこに多くの人たちが集まって

いました。私たちもそこへ行ってみると、丘の上に13個オボーが立てられ、関係者が儀礼の準備をしていました。

白いスウルデをオボーの前に立て（地面につけないようにフェルトの上に立てる）、その前に羊の丸煮、バター、茶、お酒、お金などを供え、牧民が参拝します。羊の丸煮を「シュース」と言い、牧民の一番のご馳走です。全部で9頭必要だそうです。また、オボーには大地の魂が宿っていると言われ、祭祀者たちがスウルデに魂を呼び込む儀礼を行いました。儀礼の後、訪れた人々が「神の恵み」であるシュースをいただきます。参拝者はもちろん、通りがかった人もいただけます。



白いスウルデ：チンギス時代のモンゴルを代表する紋章と幡を組み合わせた「国旗」のようなもの



「白いスウルデ」をオボーの前に立て、供物を捧げる。

祭祀には大勢の人々が訪れていました。参拝者だけでなく、観光客、商売をやっている人などがいました。日頃、目にすることも少ない伝統的な晴れ着姿の年配の人が多くいました。漢民族の商売人もいました。

祭祀二日目

朝から競馬のレースに参加する人たちが、自慢の馬をつれて会場に到着していました。午前中は大事な儀礼の準備をしました。81頭の羊の解体でした。81組の男女が羊を囲いからつれてきて、同時に作業を始めました。羊の解体には慣れていましたが、こんな盛大な光景は初めでした。映画の一シーンのようでした。そのあと、9つの大鍋で煮込みます。

昼頃、オボーからスウルデを祭祀の会場（広場）へ移動させます。300人の騎馬隊に護送されながら、広場に到着しました。そこで、81人が法螺貝を吹き、9人が経を読んで、チンギス・ハーンを演じた有名な俳優も儀式に招かれていました。

儀礼のあと、もう一つ大きなイベントである「ナーダム」（伝統的な祭り）が行われました。ナーダムでは、相撲、競馬などが行われ、入賞者に旅行会社から賞金が渡されます。内モンゴル自治区全区から来た人たちでにぎわっていました。賞金は万元単位で、普通のサラリーマンの給料の何ヶ月分にもなります。授賞式は大きなコンサートを兼ねて行われ、多くの有名人が出場しました。

今回の祭祀には、二日間で来場者数が約8万人に達したと言われています。私は儀

礼の迫力と娯楽性を肌で感じる一方、昔はどうだったのであろうと疑問に思いました。祭祀は、今日の市場経済に合わせ、観光の要素も取り入れて、復活されたと思いますが、こんな伝統があることに、祖先とのつながりを感じ、率直に子孫として「誇り」に思いました。

内モンゴルの現状

モンゴルのイメージというと、遊牧民が生活する大草原が浮かべるのが多いですが、内モンゴルは大きな町があり、町が大きいほど漢民族が多く、モンゴル人がマイノリティになっています。町に住むモンゴル人は、たいていの職場では、中国語を話せないと仕事ができない状況になりつつあります。大きい都市ほど漢化が進んでいます。街では、ほとんどモンゴル語ではやっていけなくなりました。親たちも、子ども将来を心配して、子どもを中国語の学校に通わせる例が多くなっています。

ふるさとのオルドス市でも、モンゴル人は



内モンゴル自治区フフホト市の市街地

人口の約10%しか占めないのです。モンゴル族の自治区ながら、民族の特色がどんどん失われつつあります。「モンゴルなのに、モンゴル・ゲル（遊牧用天幕）が見られない、モンゴル衣装を着ない」とよく言われます。もちろん、人々は伝統を好んで捨てたわけではありません。厳しい状況の下で、現状に合わせざるを得なかったでしょう。

私の両親の場合は、子どものころ地方で育ちましたが、職につき、町に移ってきました。父はちゃんと学校へ行けたそうですが、母の場合は、「文化大革命」の時、医者やっていた祖父（母のお父さん）が資産家とされ、祖父が連行されたまま戻ってこなかったそうです。そのため、母も学校へ行くことができなかったと聞きました。文化大革命が終わった後、名誉回復により、母は、お祖父さんの後継ぎとして、医者の見習いをするため、町に来たそうです。

日本に留学しに来てから、出身を聞かれる度に、「中国の中のモンゴル族自治区で、横綱朝青龍とは民族が一緒ですが、国籍は違う」と言ってきました。定住化と都市化

が進んでおり、子どもの頃から、モンゴルの生活を送ったことはあまりないです。

しかし、「白いスウルデ」祭祀場には、モンゴルの伝統衣装を着ている人が多くいました。大人になってこんな経験をできるのは何よりうれしく思いました。地元の人たちが大勢参拝に来ていましたが、おそらく、私と同じように、初めて経

験し感動している人が多くいるだろうと思いました。祭祀は、モンゴル人にとって、祖先への崇拝、自分たちのアイデンティティの確認の場になり、人々に急速に受け入れられている、と感じました。

祭祀復活の経緯と二つの祭祀

この祭祀を主催する管理協会のリーダーを勤めている地元の民俗学者ガルディノルブさんに会って、話を聞くことができました。この祭祀は、チンギス・ハーンが即位以来、何百年間伝えられてきたが、「文化大革命」の時一旦中断されて、今日初めて、再開されたと聞きました。私がこの地方の生まれ育ちなのに、こんな歴史ある伝統が代々伝えられていたと初めて知りました。

実は、「新祭祀」が再開する時、家に招待状が届いていました。母方のお祖父さんがかつてオボーに関わっていたそうです。当日はお父さんと一緒に行きました。訪れた人々は昔ながらの習慣で、供物を持って来ていました。バター、たん茶、お酒、シェースなどありました。お金を渡す人もいました。

親の世代の人々は知っていたはずですが、なぜ今まで話さなかったのだろうと不思議に思いました。しかし、疑問よりは感動のほうが大きかったです。

調査を進めるうちに、意外な事実が明らかになってきました。この大々的に復活された祭祀の他にも、20数何年前に再開された「白いスウルデ」祭祀があることを知ったのです。彼らは、この地域のオルドス・モンゴルではなく、チャハル・モンゴルの出自で、チンギス・ハーンの軍に属してい

た祖先から代々「白いスウルデ祭祀」を受け継いできたのだそうです。オルドスにきて400年近く続けられた祭祀は、中華人民共和国が建国以来、一旦中断されて1982年から復活されたと長老から話を聞きました。

翌年、実際にその儀礼の様子を見ることができました。最初に見た「祭祀」と比べて、規模が小さく、参加している人も少なかったです。もちろん宮殿もなく、「白いスウルデ」は一年中外に置かれています。昔のスタイルを変えず、その一族の間だけで運営、管理してきたそうです。実は、チンギス・ハーンのモンゴル統一800周年のイベントとして、観光会社から協力を依頼されたが、断ったのだそうです。

正統の祭祀集団から断られた観光会社が民俗学者の協力を得て、大々的に脚色して、新たな「白いスウルデ」祭祀を「復活」した、というのが真相のようでした。正統派の祭祀集団は、これまで、復活後も20数年間やってきましたが、それほど注目されなかったのは、祭祀集団の「正当性」を主張したためだと思いました。私は「昔からの伝統はこちらの方だ」と納得しましたが、儀礼の由来について、2つの主催集団の主張はそれぞれです。

伝統復活をめぐる複雑な事情とモンゴル人のアイデンティティ

モンゴル統一800周年での「新祭祀」復活の背景には、国家政策、行政、企業などがいろいろ関わっています。地方行政からは「旅行・文化」の振興を目指そうというスローガンを出していました。そうした行政の政策のもとで、2005年4月にモンゴル

人実業家が政府の許可を得て「白いスウルデ生態旅行会社」を設立し、「白いスウルデ」を観光に取り入れようとなりました。2006年に、モンゴル帝国統一800周年という大きなきっかけが訪れ、学者の協力を得て、伝統の儀礼と文献を参考にしながら、新たに解釈し、儀礼を再構築し大規模に復活したのです。観光開発を目的として、国内外で大きなイベントが数多く行われました。「白いスウルデ祭祀」もその一つとして、社会、メディアの注目を浴びたわけです。

これまで、政府はモンゴル伝統の祭祀を行い、注目を浴びること好まなかったのですが、2006年はモンゴル統一800周年が世界的に注目されたため、それを押さえこむことはしませんでした。しかし、実は政治的な葛藤があったようです。2006年8月の祭祀では、地方政府の高官が出席する予定でしたが、中央政府の臨時命令により参加が止められました。しかし、翌2007年正月の「白いスウルデ」祭祀には、内モンゴル自治区の党の幹部ら関係者が全員参加しました。

「新祭祀」を主催する観光会社は、モンゴルの伝統を使って、経済的利益を得ました。一方では、文化の再創造によって、内モンゴル社会に「スウルデ」ブームを起こしました。「スウルデ」のブランド価値が高騰し、会社やホテルの名前になったり、歌も出て大ヒットしました。

チャハル出自の正統的な祭祀集団は、現



「新祭祀」におけるチンギス・ハーンの騎馬隊

代社会の影響をあまり受けずに、伝統を守りぬけるという考え方を持っています。近くに、大きな観光スポットができて、祭祀の復活として大規模に行われていることに対しては、反感を持ち、自分たちの「正当性」を主張しています。彼らは、メディアには「新祭祀」ほど注目されていませんが、地域の人々に少しずつ知られています。自分たちはオルドスにいながら、オルドス・モンゴル出自ではなく、チャハル・モンゴル出自を持っていることも、周囲に知られ始めました。

この、対立する二つの祭祀に出会って、「正当性」を追求することについて、心の中ではいろいろな矛盾を感じます。しかし、伝統がどんどんとなくなっていく今日、観光を目的にしながらも、「白いスウルデ」が世に出てきたことで、私を含めて、多くのモンゴル人は、祖先と共有するものを感じ、喜ぶ気持ちの方が大きいのではないだろうかと感じています。

著者プロフィール

ソロンガ (Sulonga) 国際文化研究科博士後期課程院生

■略歴：中国内モンゴル自治区オルドス市出身、モンル族。中国内モンゴル大学モンゴル語学科卒業。2001年に来日し、2003年愛知県立大学大学院博士前期課程に入学し、現在後期課程3年生。文化人類学専攻。

■これまでの研究：修士論文で、モンゴル族家族の生活実態を通じて中国内モンゴル自治区における民族言語教育の現状を明らかにした。現在、内モンゴルでは都市化が進み、就職の統制がなくなり、競争の激化によって、漢語習得の重要性が高まり、モンゴル語が教育言語としての地位を失いつつある。国家政策としては「民族平等」理念を掲げ、多文化主義的政策も実施されてきた。マイノリティに対する「積極的差別是正政策」も取っている。しかし、市場原理の下で、政策が現実には反映されないという厳しい状況がある。

・「中国内モンゴル自治区における民族教育の現状—都市部のモンゴル族の生活実態を中心に」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』7号（2006：205）

■これからの研究：後期課程では、マイノリティ社会における「伝統」について、グローバル化、国家政策、国際関係とかかわるテーマに取り組んでいる。具体的には、チンギス・ハーン即位当時立てられた「白いスウルデ」（国旗に当たるもの）の儀礼を行ってきたチャハル・モンゴルと2006年のモンゴル統一800周年を機に、その儀礼を大イベントとして打ち出した起業家・民俗学者グループの二系統における「伝統」の継承・再編、それと関わるモンゴル社会のエスニシティ変容などを実証的に探求している。

・「中国内モンゴル自治区オルドス地方における「白いスウルデ」祭祀の「復活」をめぐるエスニシティ」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』9号（2008：191）

今後は、博士論文の執筆に向けて、今まで調査できなかった祭祀を再調査し、詳細な観察の記録を行うとともに、歴史文書の記述を収集分析し、理論の勉強にもしっかり取り組みたい。

■「共生」について：個人の体験としては、「共生」は互いを理解することから始まると考えている。多民族国家である中国に生まれ、子どもの頃から「56の民族は一つの家族」と教育を受けて育ったが、私とは関係ない遠い話だと思っていた。社会に出て、いろいろな文化を持つ人と会うことにつれて、「他者」を理解すること、「自分」を理解してもらうことの難しさを実感している。



朝鮮族の学友、金秋延さん（左）と